令和7年度　学校評価表

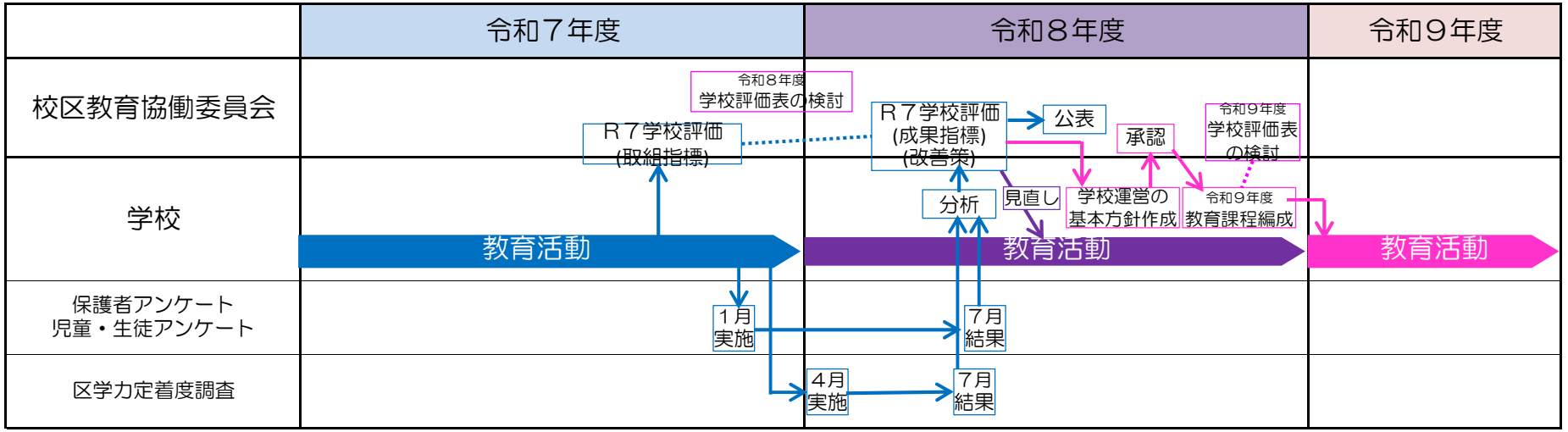
品川区立大井第一小学校	校長	**吉川　信次**
大井第一小学校校区教育協働委員会	委員長	**佐々木　文彦**

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正　令和5年３月２４日 教育長決定 要綱第５号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

⑴ 学力に関すること。
⑵ 人間性や社会性に関すること。
⑶ 体力・健康に関すること。
⑷ いじめ防止の取組に関すること。
⑸ 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。
学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和７年度の学校評価が令和８年度および令和９年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和7年度　学校評価　品川区立大井第一小学校

評価項目１　学力に関すること

重点目標	○義務教育後期課程につながる、生きて働く力の基礎となる学力の定着・向上を図る。 ・基礎基本の確かな定着を図るために、児童の実態把握を通して、系統的な指導を徹底する。 ・校内研究を通して教員の集団経営力と授業力の向上を目指し、児童の「未来を切り拓く力」を育む。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	全国（6年）、区（2－6年）の各学力調査において、全教科・領域で全国平均値を上回る。	全国・区ともに平均値を大きく上回った。	A	・学力調査の結果は、全学年で平均を上回り、良好である。少人数指導の成果も見られる。一方、学力低位層への継続的支援が課題である。習熟度に応じた課題設定や個別の声かけ、補充学習の充実、つまずきの早期把握を行い、基礎学力の定着を図る。 ・タブレット端末のドリル教材の活用は、個別最適な学習に有効であった。一方で、特に低学年においては手書きによる思考や定着を重視する必要もある。今後は、ドリル教材とノート記述や反復練習を効果的に組み合わせ、基礎基本の確実な定着を図る。
	少人数指導・習熟度別学習などの指導形態を児童の学習状況に応じて工夫したり、「すくすくスクール」や学期末個別学習などの補習において、基礎的な演算と学習内容の復習を個に応じて指導する。	・算数では、1グループの人数が少ないので、より丁寧に児童理解を図り指導を行った。 ・自力解決が難しいと予想された学習内容では、グループで課題解決するなど指導形態の工夫をした。 ・すくすくスクールでの補習が、授業中に習得が完了しない指導内容の定着に役立った。	A	
	タブレット端末のドリル教材（ミライシード）を授業の習熟を図る場面や家庭学習課題に活用し、個の習熟状況に合った学習を進める。	・単元の振り返り学習時や、宿題等で活用した。児童も自主学習の中で進んで取り組んでいた。 ・知識の定着に役立った。 ・低学年は手書きで定着させたい時期でもあるので使用を控えるなどし、学年や教科によって使い方を工夫した。	B	
②	学校公開アンケート（1月実施）の設問「学校は授業への興味・関心を高める工夫をしている」において、肯定的な回答が100%。	肯定的な回答が90%を上回った。	A	・授業内支援の充実が課題である。授業では、習熟度に応じた課題設定やペア・グループ学習の活用、個別支援の時間確保、振り返りによる理解度確認を行い、つまずきの早期解消を図る。 ・探究の深まりや思考の継続に個人差が見られる。問いの設定を精選するとともに、協働的な学びの振り返りを重視し、多面的に考える力の育成を図る。
	単元の中に、学習の中で身に付けた知識や技能、考え方を活用して「答えのない問い」に挑む探究的な課題を設定することで、児童が見方・考え方を働かせながら、主体的・対話的に学ぶようにする。振り返り活動を通して、個々の学習の状況を見取り、指導に生かす。	・振り返り活動を大事にし、毎回行うことで、児童に「学習を通して何を学んだのか」「今回の学んだことを今後どのように生かすのか」ということを意識して学習に向き合う態度を児童に定着させることができた。 ・単元で学習したことを生かして、自分で問題を作り、友達に解説することで、仲間とやり取りする機会を増やした。 ・単元ごとにパフォーマンス課題を提示し「答えのない問い」に取り組ませている。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立大井第一小学校

評価項目２　人間性や社会性に関すること

重点目標	〇義務教育9年間を見通し、社会の一員としてよりよい生活や人間性を築く。 ・「大一のきまり」の実践を通して規範意識を高め、決まりを守ろうとする態度や実践力を育む。 ・日常生活における指導を通して、気持ちの良い挨拶と返事、正しい姿勢、礼節ある言動を身に付けさせる。 ・委員会活動、クラブ活動、大一フレンドタイム（縦割り活動）の取組を通して、高学年児童のリーダーシップを育成する。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	学校公開アンケート（1月実施）の設問「子どもたちは『大一のきまり』を守って学習や生活をしている」において、肯定的な回答が100%。	肯定的な回答が80%を上回った。	A	肯定的な回答が多く見られる一方、継続的な規範意識の醸成が必要である。決まりの意識を考える指導や、児童同士の声かけを促し、主体的に行動できる態度の育成を図る。
	日常的に「大一のきまり」について指導し、日常生活で守れているかどうかを定期的に確認し、朝の会・帰りの会等で指導する。	・学年会を通して教員が共通理解を図り、指導した。 ・「大一のきまり」を踏まえて朝の会で、日直が「今日のチャレンジ」としてクラスでその日の目標を提案し、帰りの会でクラス全体で振り返ることによって「大一のきまり」の定着を深める取組を続けている。	A	
②	学校公開アンケート（1月実施）の設問「子どもたちは挨拶や黙礼をしっかりしている」において、肯定的な回答が100%。	肯定的な回答が80%を上回った。	B	あいさつは概ね定着しているが、場に応じた言葉遣いや相手意識をさらに高める必要がある。日常的な指導や児童主体の取組を充実させ、よりよい人間関係づくりに繋げる。教職員も含め、主体的に働きかける雰囲気づくりに努める。
	日常生活の中で場面に応じた挨拶をするよう適時指導する。	・日常生活はもちろん、行事や校外学習、来客時にも、場面に応じた挨拶や行動について児童と話し合い、指導した。 ・周年行事や探究学習に取り組む中で、外部の人と接触する機会が多く、その都度指導をした。	A	
③	児童アンケート（6年生）の設問「自分が所属する集団の目標達成に向け自分の役割や責任を考えて行動できる」において、肯定的な回答が100%。	肯定的な回答が80%を上回った。	A	高学年児童のリーダー性は育まれている。今後は、学校行事や異学年交流等で主体的に考え、行動する機会を充実させ、学校全体で支える意識の向上を図る。
	学年行事・委員会や大一フレンドタイム等の異学年交流活動において、高学年児童がリーダーとして活躍する場面を設定することで、主体的な取り組みを促してリーダーシップを育成する。	・異学年交流では教科の学習とは違ったよさを発揮し、活躍できる児童がたくさんいる。そこで、高学年がリーダーとして活躍できるよう手助けをしたり、高学年が下級生に尊敬されるよう意識して指導している。 ・活動後に、良かったところを直接6年生に伝えるだけでなく、担任にも伝えるようにした。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立大井第一小学校

評価項目３　体力・健康に関すること

重点目標		○健康・安全に関する指導を通して、自ら進んで健康の保持と安全に努める能力と態度を育成する。 ・日常的な運動を通して、総合的な体力および運動能力の向上を図る。 ・健康や安全に留意して生活する態度を育てる。		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	東京都体力運動能力調査において、各学年の種目毎の平均が本区の平均を超える。	概ね平均以上であるが、長座体前屈（柔軟性）に課題があることが分かった。	B	・引き続き、体育授業の充実に加え、外遊びや短時間運動、体力づくり活動を継続的に取り入れる。また、ストレッチ、柔軟運動の充実を図り、楽しみながら運動に取り組む習慣の定着を図る。 ・個々の体力差や運動経験に応じた活動を工夫し、児童が主体的に運動に取り組める環境づくりを推進する。
	体育朝会やスポーツトライアル等の取組を通して、総合的に体力の向上を図る。	・チャレンジジャンプが継続した運動につながっている。 ・体育朝会意欲的に取り組むクラスが多く、また休み時間も活発に遊んでいるため、総合的に体力の向上を図ることができた。 ・体育の授業では運動量に重点を置いたり、体力向上のための動きを導入時に取り入れたりした。 ・運動が苦手な児童も頑張って取り組んでいる。昨年度、課題にあがった上体起こしは、今年度は全学年とも都の平均回数とほぼ同様であった。	A	
②	10月に行う、自転車乗車時のヘルメット着用調査で、着用率100%にする。	自転車に乗る児童の着用率が90%を上回った。	A	・ヘルメット着用率は良好であるが、継続した安全指導や啓発運動を行い、全児童の確実な着用につなげる。 ・保護者への啓発を継続し、学校・家庭・地域で連携しながら、自転車乗車時のヘルメット着用の習慣化を推進する。
	日頃より児童のヘルメット所持状況と着用状況を確認し、日常的にヘルメットの着用を指導する。また、学校だよりや学年通信等を通じて、家庭との連携を図りながら指導する。	・定期的に交通安全について指導した。ヘルメット着用についての保護者向け文書も配布し、各家庭への周知を図った。 ・交通安全教室などを通し、適宜指導している。 ・日常的に声掛けや確認を心掛けている。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立大井第一小学校

評価項目４　いじめの防止の取組に関すること

重点目標	○全教育活動を通して自尊感情を育てるとともに、自他の生命を尊び偏見や差別をなくし人権を尊重する態度を育成する。 ・伝え合い、学びあう授業を通して友達のものの見方や考え方の多様性に触れ、相互に尊重しあう態度を育てる。 ・児童観察、生活アンケートの実施、スクールカウンセラーの面談（5年生）等を通して、児童の人間関係を把握し、全教職員でいじめの早期発見と解決をする。 ・人間的なふれあいのある体験活動を通して、困難に負けない「強い心」を育む。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	令和7年度いじめDアンケート（3月実施）で、いじめ等嫌な思いをしないで過ごせていると回答した児童が100%。	肯定的な回答が80%を上回った。	B	・対話的な学習場面を充実させ、自分と異なる考えを受け止めながら、互いの意見を尊重し合う学級風土の醸成に今後も努めていく。 ・アンケートを活用した実態把握を継続し、教職員間で情報共有を密に行いながら、迅速かつ組織的な対応を推進する。 ・いじめを許さない風土の醸成に向け、日常的な指導や児童理解を基盤とした学級・学年経営を推進する。
	市民科授業や教科指導において、伝え合い、学び合う指導を通して、相互に尊重し合う態度を育てる。	・グループワークの時には、全員が話合いに参加してるか、また聞きあう姿勢はどうか確認するようにしている。 ・市民科の授業では、妥協せずに教材研究をし続けた。児童の実態を大切にし、どのような教材・教具を使ったら一番有効かを考えて授業をしてきた。また、きれいごとで終わらぬよう、モラルジレンマを取り入れながら、自分事として課題に向き合えるよう工夫している。 ・「相手の意見を最後まで聞く」「前向きな相づちで意見を受け入れる」など、話の聞き方や伝え方を具体的に指導した。	B	
	児童観察、生活アンケート、デイケン、いじめDアンケート、NiCoLi等を通して、いじめを早期発見し、組織で解決を図る。	・各種アンケートを足掛かりに、相談しやすい環境を整えるようにした。反応があった時はすぐに対応した。学年間の情報共有も速やかに行った。 ・児童の気になる様子などは、担任、管理職へ報告し、早期に対応している。	A	
	「いじめは絶対に許さない。させない」という正義ある学級経営、学年経営を行う。	・「いじめは絶対にだめな事である」と、日頃より全校で働きかけている。未然防止、早期発見を心がけ、校内で情報交換を密にして取り組めている。 ・「どのような行動がいじめにつながる可能性があるのか」を、児童に具体的に伝えている。 ・「トリプルチェンジ」の学習がわかりやすい内容になっており、児童にその意識はかなり浸透した。 ・いじめにつながる事案が発生した際には学年、管理職、保護者とともに対応した。取り組む姿勢を見せることも、いじめを許さないという心構えを伝えることになったと感じる。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立大井第一小学校

公開

評価項目５　（特色ある教育活動に関すること）

重点目標	〇地域や保護者の理解のもと、協働して教育活動を行う。 ・学校ホームページや正門掲示板で行事や各学年の取組、学力の定着状況など、本校の教育に関する情報を速やかに公開し、保護者や地域の方が本校の教育活動を理解できる機会を提供する。 ・学校地域支援本部の協力の下、計画的にボランティアを募集し、保護者や地域の方に積極的に参加してもらう。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	品川区保護者アンケート（1月実施）の設問「現在通っている学校に満足している」における肯定的な回答が100%。	肯定的な回答が80%を上回った。	A	継続的な情報発信を行うとともに、教育活動の成果や取組の意図がより伝わる内容の工夫を進め、学校理解のさらなる深化を図る。 ・SNSの活用など、情報を効率的に発信する手法を検討する。
	学校だよりやホームページ、正門掲示板等で月1回以上情報を発信する。	・担当やボランティアの方によって、定期的に効果的な発信ができている。今後はもっと多くの人が関わるようにすると、充実した発信ができるだろう。 ・学校の様子をもう少し伝える機会があってもよいと感じる。紙媒体ではなく、保護者の目に止まりやすいホームページを活用していけるとよいと感じた。	B	
②	ボランティア等で教育活動に参加するボランティアの数が延べ120人を上回る。	昨年度（令和7年度）の参加者は延べ218人であった。	A	地域人材の継続的な参画につながるよう、学校地域コーディネーターとの情報共有を密にし、計画的なボランティア体制の充実を図る。
	学校地域コーディネーターと学校が協働して、協力が欲しい仕事を見える化し、計画的にボランティアを募る。	・学校地域コーディネーターが関わってくれることで、児童の学習を教員の力だけではなしえないような、とても価値ある取組にすることができた。 ・今年度は読書に関する新しい試みが増え、ボランティアティーチャーを活用する機会を増やすことができた。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成